

六花

RIKIWA

7

俳句雑誌りつか

2016 (平成28年)
cover design Yuna Mizuno

蛩の忘れゆきしや靴ひとつ
灘風に茅の輪くぐりの仕度かな
白足袋やこの浦舟に帆を掛けて
涼しさや子どもの復習ふ能舞台
夏袴正しお師匠さまお成り
千切れ藻の流れてきたる卯月かな
神主の麦わら帽子脱がざりき
桑苺よもつひらさか数へ歌
播州に清水寺や河鹿笛
大王の四方誉めましし青田風
蛩の祭のごとく果てにけり
猫跳んで蠅取紙を掴みけり
赤星を一つ代田に風の止む

大楠の夏鶯をこぼしけり
父の声確かめながら追ふ蚩
蚩や子どもに化けし闇の声
三日月は宵から寝顔蚩待つ
一回り違ふ申なり真桑瓜
油断なりまつげつかまる蜘蛛の糸
石段を下りし二人へ半夏生草
灯の中を二つ巴に錦鯉
畔駈けるかみなり雲のすぐそこぞ
蛇さへも懐かしく見ゆこの頃は
汗の顔紙せつけんと云ひしがあり
山楯子の花を嗅ぎある晴間かな

雪嶺抄

花の昼

笹村 政子

カリヨンの鐘に暮れゆく花吹雪
川向うまでのお使ひ花の土手
行きずりに校歌聞きをり花の昼
ぼんぼりのひとつありたる花の闇
呼ばれたる子の呼びかへす夕桜
いつとときの空の賑はひ鳥雲に
夕暮の棚にこぼるる梨の花
裾野ゆくひとり遍路の見えかくれ
薔薇の門傘のしづくを切りにけり
仰ぎみる夫の破顔や初つばめ

雪卿集

花
篝

佐津のぼる

しなやかに風の離れぬ糸ざくら
花吹雪吐いては揺るる大樹かな
渦巻いて地にとどきたる花吹雪
花筏堰より落ちてうやむやに
灯されて日暮はやまる花篝

葱坊主

松本文一郎

機嫌問はば咲いた咲いたの花便り
花吹雪く闇魔の像の呵呵大笑
梳りをれば残れる花一片
春昼や乗越切符唯何され
葱坊主背丈を競ふルールなし

雪卿集

春の鷺

志方章子

丸窓に丸き目差しや桃の花
ままごとの道具にしたる雛調度
餌を食めば影も餌を食む春の鷺
鉄管の錆の中より春の草
城の空一隅昏し鳥帰る

芝桜

出口

誠

春雨が夜風に吹かれ強くなる
鈴成りのまんじゅうとなる八重桜
側溝へあふれてをりぬ芝桜
夜半の春寝てもさめても父のこと
下の方三つ咲きたるつつじかな

雪卿集

花過ぎ

升田ヤス子

落椿あられこぼしの道に伏す
花過ぎの庫裡に来てゐる菓売り
シーソーのつくたび踊る花の塵
日の乗りてをりたる朝の桜かな
赤がちに孫文蓮の葉を巻ける

桜

永田万年青

二部咲きの花の枝から鳥発てり
造幣局枝垂れ桜の掃いてをり
男坂空覆ひたる桜かな
離宮道雨後の花びら靴に付く
散る花のいつしか消える舗道かな

花過ぎの庫裡に来てゐる薬売

升田ヤス子

はなすぎのくりりにきているくすりうり　ますだやすこ

落椿あられこぼしの道に伏す

花過ぎの庫裡に来てゐる薬売

シーソーのつくたび踊る花の塵

日の乗りてをりたる朝の桜かな

赤がちに孫文蓮の葉を巻ける

桜の頃は大黒（僧侶夫人）は花見に来る種家の「おもてなし」で忙しい。桜を愛でる暇もなく、盆正月の主婦のように立ち回る。桜が終わると寺の庫裏（台所や居間）でぼっと一息ついていると、「まいどはやー！」と富山弁の薬売りが置き薬の荷を上櫃にどかと開く。北陸の雪が解けると置き薬の交換に全国へ出稼ぐ。「紙風船」が春の季語になっているのは春、葉の「おまけ」に紙風船をはじめ、「食べ合わせ」の表や当時の歌舞伎の情報や、紫雲英の種など軽いものを中心に日本中に配ったことにも深い関係があると想像している。富山では他県出身の人を「旅の人」と呼ぶ。

山桜遠き田川に散りにけり

藤生不二男

もうじきに門の閉ざさる桜かな

かがり火の消えたる闇の桜かな

夕桜背なより冷えてきたりけり

山桜遠き田川に散りにけり

犀川に風の吹き込む桜かな

やまざくらとおきたがわにちりにけり ふじおふじお

遠くの田川に山桜の花吹雪が見える。遠くからでも見える大きな山桜の実景に違いがないが、「遠き田川」の「遠き」に過去が潜んでいるのであろう。杜甫の詩「過宋員外之問旧莊」の一節「寂漠向山河」（せきばくとしてさんがにむかう）を思い起こす。心寂しく山河を眺めているのだ。「木は高ければ高いほど、悲しい風を受ける」と杜甫はいう。杜甫は尾聯の言ったその言葉をかみしめているように不二男もまた、山河の光景を故郷の零落に重ねてしまうのだろう。不二男の故郷は亀田氏の住む佐用町桜山。田川は田の間を流れている川のことだが里山の景色という意味。

雪樹集

土
筆

住田千代子

根つめて土筆の袴取つてをり
幸せのちよつぴり苦き土筆かな
山門に掃く音を聞く彼岸かな
暗がりに点りてをりぬ落椿
浴槽にほぐれて来たる花疲れ

蚩
鳥 賊

溝
渕 弘志

蚩鳥賊旬を過ぎても届かざる
多すぎるほどがありけり寿司山葵
蜆入る宅急便を受けにけり
滝桜わずかに残し我を待つ
八重桜向かうに見ゆる天守閣

蛩雪譚

六甲選

※調子は効果的に破れ、

二十八年七月号鑑賞

落椿あられこぼしの道に伏す

升田ヤス子

まず読者は「あられこぼし」という言葉につまづくかもしれない。桂離宮の庭が有名。桂離宮御幸門を潜り右へ曲がると御幸道が続く。その道が玉石を敷き詰めたあられこぼし。当に霰をこぼしたような感じ。石は平面を上埋め込んであるので、歩きやすい。」そこに椿が落ちて伏せた酒杯のようになったのである。「あーあ、椿の中が見えないわね」と残念に思っているのだろう。この句の椿は落ち初め一花だけを詠んだと思われる。が、沢山落ちてはいる椿の中の一個に焦点をあてたのかも……。しかし落ち始めの感動と息を吐きたい。

二部咲きの花の枝から鳥発てり

永田万年青

万年青俳句は誠と同じく、徹底した客観写生に打ち込んでいる。よく飽きない物だと感心する。意志を曲げない頑固な男は女性に持てると何時か聞いた。それから考えると（考えなくても）主宰は朝令暮改だから女性に持てない。て、そんなことを書いている場合ではない。この句、実はただの木の枝からではなく、「二分咲き」の桜の枝から鳥がとびたつたこ

とに意味がある。そう、その通り、鳥が飛び立つ際に二分咲きの桜の枝を強く揺らす。その刺激によって桜が早く咲き満ちるのを促してくれているのだ、とも思える。そのところを万年青は計算をして詠んだのである。このことを見逃して「ただの写生だ」と書いたりしたら主宰落第である。万年青は何食わぬ顔で主宰をたしなめる。

